

壮春力歩

会長 鈴木 末一

ある少女の言葉から

月に2~3回ほどしかバスに乗車しない。昨年末の幹事会の後、ノミニュケーションで話題殺到、あーだこーだで議論百出。皆さんの会への思いの丈をひしひしと感じ、バス待ちの停留所で頭の整理を・・・。

お父さんに連れられた小学校低学年の少女と乗り合わせた。その親子連れは、途中のバス停で降車したが、少女が運転手さんに「ありがとうございます」と明るく爽やかに言葉をかけて降車していった。父親は軽く会釈をして降りていった。少女から言葉をかけられた運転手さんは、「気をつけてね」との返答。

その時は、まだ頭の整理中であつたが、爽やかな微笑ましい会話に、色々なことが思い出された。真っ先に浮かんだのは、某小学校でのことである。それは、給食の時に「いただきます」「ごちそうさま」と、どこの学校でもごく当たり前に行われているはずだと思っていた。しかし、その小学校では、一人の母親から何故「いただきます」と言わせるのか、との発言があつたそうだ。

「給食費を払っているのだから、そのようなことを言わせるのはおかしいのではないのか」と抗議が再三あり、学校側も、それに屈してやめてしまったという。

食前の「いただきます」、食後の「ごちそうさま」は、食事がいただけることに対する感謝である。お米は田おこしに始まり、苗代づくりから収穫まで、多くの人たちの働きにより頂けると教わり、一粒の米粒でも大切にしなさいと祖父母や両親などから常日頃仕付けられたのであつた。

勿論、お米だけではなく、食材の全てについて、多くの人たちの努力によって提供されるものであるし、野菜や魚など全ての食材、つまり自然や生き物たちから「大切な命をいただいている」ので

あり、「いただきます」は、そのことへの「ありがとう」という感謝の気持ちも含まれている。嫌いな物もあるかも知れないが、生き物がいることが、私たちの暮らしと繋がっているということ、子々孫々伝えていかなければならない。

感受性豊かで感性が最も磨かれていく幼少期を、どのような環境の中で過ごしたかによって、逞しく生きる力などの人格形成に大きな影響を及ぼしていくのではないだろうか。

青少年の現状を見ると、多くの人や社会、自然などと直接触れあう体験の機会が乏しくなっている。特に、情報化や科学技術の進展は、直接経験の機会を減少させている。青少年の豊かな成長を支えるためには、様々な体験活動の中でも、自然体験活動の重要性は高く、幼少期より積み重ねた体験が心に残り、自立的な活動を行う原動力となるものと思われる。そして、成長した時に新しい公共を支える良き市民に成長してくれることを期待したい。

そのような意味合いから、会の理念の一つである地域社会への貢献を掲げている。意識的、計画的に多様な体験活動の機会の充実を図り、思いやりや心の豊かな人間性や社会性、自ら考え行動できる力などを培っていくことへの、学習支援活動について、スキルアップを図っていききたいものである。

昨秋、高知県立牧野植物園を訪れた。正しく人と自然の関係を大切にしたい安らぎの空間でもあつた。一大パネルに牧野富太郎博士の言葉が、掲げられていた。「人間はもともと自然の一員なので、自然にとけこんでこそ、はじめて生きている喜びを感じることができるのだと思います」。

この言葉の持つ意味を私たちは受け止め、次世代へと伝えていかなければならない。

また、新春講演会で菅井啓之先生のご講演「自然からいのちのあり方を学ぶ」を拝聴した。身近な自然への眼差しから、全体の自然へと思いを馳せていくことにより、自分自身を変える原動力になり、広がりのある物の見方へと繋がっていくのでは・・・。

一人の少女の言葉から、徒然なる思いの一端を。